

宮内庁書陵部所蔵九条家本『八幡并賀茂行幸記』（『中右記』抜書）

【略解題】

函架番号「九・98」。卷子一軸。本紙二四紙。天地各一本墨界。鎌倉時代写。後補表紙直書外題「八幡并賀茂行幸記」（九条道房筆）。本紙端裏直書「 、 」。

藤原宗忠『中右記』からの行幸関係の記事を抜書した部類記で、鳥羽天皇による保安二年（一一二二）三月十四日の石清水行幸、同年四月七日の賀茂行幸、翌三年九月十四日の石清水行幸、同二十八日の賀茂行幸の記事を収める。目次記の『中右記』としては残存していない期間であるため、それを補う記事となる。『大日本史料』第三編二六・二九・三〇冊に割裂して収載しており、原形に復して通読できるようにした。内容についてはその標出などを参考にされたい。このとき記主は、保安二年には供奉、翌三年には上卿を勤め、後者の記事は特に詳しい。

なお天仁二年（一一〇九）八月の行幸（保安二年四月七日程）は、鳥羽天皇の初度の賀茂行幸であり、保安三年九月十一日程に先例として見える、円融天皇の石清水行幸は天元二年（九七九）三月二十七日、一条天皇は永延元年（九八七）十一月八日、長徳元年（九九五）十月二十一日、長保五年（一〇〇三）三月四日とあるが、確定するだけの史料を確認していない。また同じ保安三年九月十一日・二十八日程に嘉保二年

（一一〇九五）三月二十九日の堀川天皇第二度石清水行幸に宗忠が行事弁となったとあるが、この折の『中右記』は目次記として残り記事も詳しい。先例として散見する天喜四年（一一〇五六）の大宮右大臣殿は、宗忠の祖父俊家である。

禁裏・公家文庫研究プロジェクトによる作業として、藤原重雄・太田克也・糸賀優理が校正・整形を行った。

【凡例】

- ・料紙の変わり目には「」を付し、（第1紙）のように紙数を示した。
- ・原本の行替わりに従ったが、体裁を改めた場合がある。
- ・文字は原則として通行の字体に直し、読点と並列点を加えた。
- ・欠損箇所は□によって、文字として判読できない箇所は☒によって示した。
- ・抹消文字はその様態を問わず、見せ消ちの符号を左傍に付した。
- ・重ね書きは、上に書かれた文字を採用し、その左傍に「・」を付し、下に書いた文字を判読できる場合は「×」を冠して傍記した。
- ・「」は文字の校訂注として、「（）」はそれ以外の説明注として用いた。
- ・人名注記は原則として各年の初出に付した。

〔外題〕
八幡并賀茂行幸記

保安二年三月三日、丁酉、今朝八幡・賀茂行幸行事所

始、上卿源大納言(雅後)・新宰相中將雅定(源)・左少弁実光(藤原)為行

事、以一本御(書)。所為行事所云々、八幡行幸今月十四日、賀茂

行幸來月七日者、今日行幸御祈奉幣定、七社、來十日云々、

四日、今夕兩社行幸御祈讀經定云々、

五日、庚子、(母倉)天陰、今朝八幡行幸巡檢点地云々、是依無

日次、一日之中共有此事也、且又先例者、(文頭)弁以下行向云々、

十日、(乙巳)今日行幸御祈七社奉幣云々、

十二日、丁未、今日八幡行幸路巡檢云々、又行幸御祈讀經云々、

十四日、己酉、(復)天快晴、日甚明、今日有行幸石清水、仍辰剋

參内、中宮大夫能俊卿移着端座、召大外記仰云、以左右大

將為左右馬寮御監者、是共新任之間、被仰下也、行事上卿

源大納言遲參間、時剋推遷、及巳剋源大納言被參着端

座、召少内記令進宣命草、進弓場殿奏覽、(藤原忠実)殿下御于御前

每年可有行幸由、從去年雖被始、去年。始了由、今度被載

也、(藤原)奏聞了後、被起座、藏人右衛門權佐頭賴仰云、行幸召仰并

留守事可仰下由、下知上臈按察大納言經実卿、(藤原家忠)左大將雖被參、依

按察使移着端座、召大外記被仰下、猶可被仰下行事上

卿歟、(賀茂)於日時者、先日巳一剋御出、(藤原)光平朝臣右次將中將忠宗・少將

(藤原)宗能朝臣等引率御輿長等渡階下向日華門、公卿列立、

左大將家、按察大納言經、源大納言雅、藤大納言(藤原仲実)・右大將(源有仁)立右

右衛門督實、下官、別當、侍從中納言実、(藤原通季)右宰相中將雅、中宮權大夫通、新宰相中將雅、左大弁、

三位中將(藤原)寄御輿、葱華、右宰相中將頭雅取劍璽、出

御從東門、經烏丸・土御門・東洞院・三条・大宮・七条・朱雀等大路、

爰上皇於鳥羽長実朝臣宿所棧敷、有御見物、(藤原)此曉有御幸也、御

御京御供奉諸司守次第一々渡之間、時剋推移、未一点着御

八幡宿院、源大納言進御所辺被奏宣命、昇立神宝置御

幣有御禊、行幸宰相雅定取使上卿插頭花、殿上人取舞

人・陪從插頭花、事了參上宝前、(藤原忠通)関白殿退下御宿所、予

扈從其後、相具兩少將退下、權別當円賢房休息、日漸暮

間、有小所勞不能參宿院、竊以前行、依便路參三条殿休

息、經一時後行幸成、予騎馬加列、子一剋還宮、少納言俊隆

鈴奏、公卿名對面、(左少將頭)人々退出、

後聞、秉燭以後事了、上卿帰參、依為每年事無寺家賞、

行事、源大納言・宰相中將雅定・左少弁実光・外記・史、

檢非違使、

留守、中宮大夫能俊・右少弁師俊・藏人、

舞人、(藤原)師隆朝臣・經忠朝臣、

陪從、(藤原)家保朝臣・盛家朝臣、

〔第1紙〕

〔第2紙〕

十九日、甲寅、今朝賀茂行幸点地云々、

四月七日、辛未、天晴、昨日・一昨日雨、今朝得晴 今日每年賀茂行幸也、仍巳時

許参内、先按察大納言早参、召仰事・留守事中官大夫能俊卿、左少弁師俊留守、

道事被仰下、又上卿源大納言被奏宣命草了云々、左大将

被参、頭中将(藤原宗輔) 仰下云、今日擬階奏依行幸可延引、大将

被仰下、去天仁二年八月十六日行幸当社日、駒引延引之由、召仰之次、被仰下也、外記了、此間神宝御覽

者、巳四点御出南殿、光平朝臣候反問、右次将中将忠宗朝臣・少将(藤原公教)

出本陣渡、左大将家・按察大納言經・源大納言雅・藤大納言仲・右

大将有・予・別当忠・侍從中納言美・源宰相中将頭・中宮權大夫通・

右兵衛督(藤原美行)・左大弁長・新宰相中将雅定・二位中将美能・列立、

寄御輿(忽華、新開白殿令候給) 出御左衛門陣、舞人(藤原)頭保於陣頭落馬、

然而不及損身者、經土御門・東洞院・一条、院御所門前(町力)正親司東

立御車有御見物、殿上人衣冠祇候、修理大夫頭季着直衣祇候、頗以無便、着衣冠可被候敷、御車下三位已上行幸日直衣、

供奉諸司守次第一々渡間、時剋推遷、午剋着御下御社、御所

先於幔門下、公卿列立幔中、西上北面、寄御輿於御所、不候御輿寄如何、或人云、

獻御麻、可(水)主氷供御手水、此間源大納言雅俊奏宣命清書、行事上卿

掃部敷葉薦、内藏寮立案二脚置御幣、有四捧、神祇官人

昇立神宝、神馬牽之、左右將監牽之、先頭中将依殿下仰云、左右

馬寮神馬、以左御馬可被奏下御社敷、如何、予依不愴覺

不申子細、但可被尋(二月十六日)去年例也、頭中将云、去年寮馬不候之

間、被申院、殿下御馬被用神馬也、以院御馬枉左被奉下御

社也、予申云、然者只依去年例、以左御馬被奉下御社、何事

之有哉、仍用左馬也、舞人牽御馬、上臈師隆・經忠朝臣不牽如何、下臈三人牽之、依幔中狹少也、

供御贖物、從北供奉、頭中将陪膳、新少将公教益供、依五位藏人不参也、御拜御座北二間、宮主獻御麻着座、入從北、

使進寄案下取幣二捧立御拜、陪從於幔門、發歌笛声、

使復座、宰相中将雅定取挿頭花指使冠、行事宰相也、使出幔外、

徹神宝、使上卿参社中、為先舞人、行事弁美光、内記・外記・史相從、新殿下退下御

宿所、予・頭中将・殿上人五六人屬從、有盃酌、社司進奏、是下社習也、使帰参、於幔外御願平安之

由付中将被奏、徹前幔敷座、頭中将召諸卿、按察大納言以

下着座、左大将有所勞被帰了、舞人・上卿馬次第馳了、寄御輿、公卿前行、

行事上卿談云、神宝昇立、誦宣命、廻御馬、東遊、曲舞、

御神樂也、而渡神宝於社司之間、社司等申云、神祇官人

所取渡也、不然者不可受取者、尋此事土御門右府御記、(源師房)

神祇官受取渡社司者、付件記申行之処、神祇官全

不承引、甚不便也、近代只神祇官人於御前所役許也、於社

中、行事史生・官掌等取目錄敷渡也、此事可尋知、

秉燭以前着御上御社、公卿列立幔中、北面、東上、次第如下儀、(下御社)但御禊

於北庭被行、事了人々於宿所休息、及亥剋使帰参、被奏御

願平安遂了由外記進見参、上臈被遲参之間、源大納言

付頭中将被奏口給、々外記、頭中将取殿下御祿、上達部祿、殿上人取之、

無人・陪從給祿敷、不徹慢之、先舞人上御馬如何、凡臨夜陰狼

藉無極、又上達部不被參、纔五六人許也、右大将不被參間、

且寄御輿、還御之間、雖無御見物、如本渡院門前也、子剋還宮、

少納言俊隆鈴奏、公卿名對面、左少將頭國問之、

無社司并行事官賞、是依每年事也、上社司不奏葵、御禊

日供神之後、分人々者、異下社也、新藏人清兼留守、(藤原)

公教本入舞人、而一日俄被成右近少將也、仍辞舞人供奉本陣、(四月)

近日次將五人有障不供奉之故也、其替藏人左衛門尉匡周俄、(大江)

被入也、

裏書云、

殿下、比倍支、下襲、紺地緒、御馬副侍等、今度瀧口不召也、

御拜座、今度北廂中間二供也、仍北庭二昇立神宝、庭甚狹

少也、先々南廂一間二供也、南庭二昇立神宝、向北有御禊也、

是依所広有便宜也、又上御所有御輿寄、下御所不候如何、(前)

可候者、乍二所可候、又不可候者共不可候也、凡以不儲可為

善之由、人々被申、可尋敷、(×記)

(三行空キ)

保安三年八月廿四日、藏人左衛門権佐送書云、(藤原頼頼)来月十四日可有行

幸八幡之由所被仰下也、上卿可勤仕、行事右中弁者、(源雅兼)申承了

(第4紙)

由、来廿九日可始行事所者、外記・史行事早可被仰下之由且以返事了、

廿九日、乙卯、九月着左近陣輿座、藏人左衛門頭頼来仰云、来月十

四日可有行幸石清水、又可有行幸賀茂社、上卿可勤仕、同日時

可勘申、左大弁并右中弁雅兼朝臣同可為行事、於外記・史者

相量可為行事者、此仰詞中十四日由不可被仰下者、只日時可勘申と可仰也、内々日時雖相定上卿二仰詞只可勘申日時と可仰也、

予奉仰移着端座、令敷膝突、召右中弁、則来、内々皆召儲也、予仰云、

石清水・賀茂行幸日時可令勘申、又件事可行也、於史相尋

可召仕者、右中弁持来勘文、其次申上云、相尋之处上臆史

行親可召仕也、同可為行事之由仰了、披見之处、来月十四日、(中原)石清水

幸、同廿八日賀茂行幸、共從東陣可出御、暫置座前、召外

記令進筥、入勘文令内覽奏聞、右中弁云、期日近々、此次進請

奏、早可内覽奏聞由仰含了、請奏一通也、可有二通也、金銀類請納殿之請奏可相副敷、件旨示了、

日時奏下之後、可進請奏也、則歸家来下、予召外記業俊下日

時之次、行事可勤仕由所仰下也、件業俊雖下臆可召仕之由、内々大内記告示之、上臆等有故障也、又左大

弁同可為行事由、仰外記了、可始行事所之日時勘文所持来

也、今日酉時、件勘文依不奏直下弁了、頭頼来云、以檢非違

使康清・経則可為行事者、則仰下弁了、予起座引卒行

事、予出從敷政門向行事所、行事檢非違使後日雖被仰下、後日近々以今夜被念仰也、(藤原家忠)此間左大将被參、可定申諸國

条事由、雖被示、依始行事所忿退出之由、申左大將了、此間

(第5紙)

秉燭、入從陽明門、着一本御書所、兼引幔母屋三間、西壁下

敷上卿・宰相座、東面、北壁下敷外記・史、座脫之南座陰陽寮、与上官南

庇史生・官掌座、同庇北一間敷清薦、上置木一支、先各着座、

早令勘可始神宝日時、陰陽寮頭家榮・助宗憲在座召紙・

筆・硯勘之、史生持来、次史生進史、本定進[□]弁覽予、見了返下給申

文下史、々生召細工、令作錦蓋手各一、石清水御料一、賀茂一、有一獻、右中弁

勸盃史取傳宰相、留盃、立箸、弁覽行事所史生・官掌夾名、

史生八人、官掌一人成弘見了返給弁、又成吉書、弁・史又加署名、加賀国召物其

後拔箸起座退出、但弁・外記・史留行事所、召物事今夜可沙

汰由所申也、

卅日、丙辰、天晴、晚景參内、依可申定行幸御祈奉幣・御誦

經日時也、先奏事由、移着端座、令敷膝突、召右中弁仰可

勘申奉幣日時由、則持来、来五日、披見置座前、召外記令

進例文、入管持来、令左大弁書定文、七社、伊・石・清水(賀茂)使參議三人、

左大弁長忠、行事宰相必所入也、新宰相中将宗輔、新宰相伊通、藤原書了持来、入勘文・使定文於管、暫留例

令右中弁內覽奏聞、了召外記、加入例文下給外記、仰云、早

可催者、

予又移着端座、召右中弁、令勘行幸御祈誦經日時、則

持来、来十三日、披見置座前、可進例文之由仰右中弁了、史入管

持来、令左大弁書詣社、石清水、賀茂上社、同下社、松尾、平野、稻荷、春日、大原野、住吉、日吉、北野各入

(第6紙)

僧綱一人、又諸寺御誦經、八寺、或百口、或卅口、入例文數、左大弁持来、披見

畢入日時・僧名等、暫留例文令右中弁內覽奏聞、了推卷日時・僧

名、下右中弁、則弁結申日時、仰云、依勘申、結申僧名、仰云、各卒

十口僧侶三夕日轉誦仁王講、經行幸日可無風雨難可祈申由、仰了、

諸寺御誦經又如此、次召史、返入例文於管給史、取重硯管退出、

次右中弁進奉幣請奏、早內覽奏聞之後、可被下由示了、又

藏人來下伊勢幣料宣旨、結申召右中弁下了、右中弁持来

大祓・点地・巡檢勘文、依不奏之文、予披見給右中弁了、兩社共大祓

又一紙、石清水点地、四日、巡檢十三日、点地十口日、巡檢廿五日、(七九)但大祓日時下給外記也、幸早日

九月一日、丁巳、今日頭弁被定申行幸舞人・陪從、此中将・少納言

入舞人由、所被告送也、

今朝藏人佐頭頼來云、無弁濟使国々注文奏覽院之处、仰云、

安房国介(藤原)上野守令明所緣也、近日下向、後日被免了、下総国猶可尋・下野国近衛・大和・

河内可責拒捍使、檢非違使・隱岐国、近日關国也、但又行事檢非違使康清辞

退事被仰別當、可被仰左右者、則以消息下知右中弁云々、(源雅美)

二日、隱岐国召物從行事所注文付藏人佐了、右中弁送書

札云、康清辞退替以光信(源)可為行事者、又兵衛尉功賜平

信俊了、馬允功賜源貞俊了、以件二人功物可仕行事所召物

不足者、

三日、予以消息仰右大弁云、伊勢幣前一日可弘路次汚穢・不

(第7紙)

淨物之由可被下出也、^(想)又來七日可有奉幣之由、兼可被告殘六社也、近日桂河水霖雨之間頗出也、松尾奉幣使被渡料可儲舟

由可被下知行事檢非違使也、勢多橋近日破損之由有風聞、早

可沙汰由可被下知近江国司也、伊勢幣使渡給之間、有恐故也者、

右中弁返報云、一々件事所下知也、於勢多渡者可儲舟之由国司

申上者、又以行事史行親申上云、大宰符召物支配管国司

々之由所申上也、仍付在京本所可催也、去年行幸之時如此

者、早可催由仰了、

四日、庚申、天雖陰雨不下、行幸点地、行事右中弁以下行向也、

至宿院見定御所後、今日歸了云々、明日可早參之由以消息

仰大内記許了、依七社奉幣宣命事也、

五日、辛酉、天陰、今日行幸御祈七社奉幣也、仍辰剋參内、着端

座、令敷膝突、先尋大内記之処未參者、早可遣召之由、仰外記

畢、此間外記業俊進卜串、入筥、乙卜合、丙合、不合三人也、予返給外

記、仰可披之由、外記則於膝突披乙下合・丙合二人、乍入筥又覽

之、以乙卜合正清王可為使之由仰了、外記称唯、取筥退出、外記

業俊又出小庭申云、使王御馬申、予予揖、外記称唯歸了、

南殿巽角間立御屏風二帖、儲御拜御座、頃而大内記宗光

參入、令進宣命草、則入筥持來、披見了、無別辞、兩社行幸

日。無風雨難之由作載也、返給令内覽、^(藤原忠通)殿下御于里亭也、此間

(第8紙)

新宰相中将宗輔也、又以使幣早々可裹之由示八省、又召外記使々慥可令早參之旨仰了、大内記歸來云、内覽了、早可奏、

於清書者不可持來、令持大内記進弓場殿奏覽之、^(付頭)

此次使王申御馬之由奏聞、則返給仰云、可令清書、使馬可給

御馬者、返本座、大内記置宣命、返給云、早可清書、召外記

仰云、使王御馬給、外記称唯歸入、^(此事不定、或清書之次申時ハ、參八省後之御馬給之由仰下云々)

大内記持來清書、^(七社、伊勢宣命横置上、伊・石・賀・松・平・稻・春、一々見了、如本給之、令持)

大内記進弓場殿、^(令告上官、々々等皆屬從、立南殿南階西邊)御覽了返給、出從月華

門并西陣、於近衛室町辻乘車、宰相中将以下上官等相從

入從待賢門向八省、此間小雨灑入從嘉喜門、依雨無出立、着門

腋西座之端上程、以召使召行事弁、左少弁実光來膝突、^(藤原)行事

右中弁今日依忌日出仕、仍今日事假仰左小弁令行事也、問云、幣物具。哉、申具了由、予揖弁起座、

以召使召外記、々々業俊參居壇上、^(不進膝突、依為六位也)予問云、皆參了、但

次官為忠遲參、早仰可催之由了、以召使仰云、伊勢宣命可

持參、小内記重実、^(中原)次宣命筥立壇下、^(又體)先可進上卿前敷、予

起座着東廊座、^(經壇上柱外、入從座次、北間着座、西面)行事弁・外記・史相從、内記

持宣命筥在予後、各着座、内記置宣命筥於予座前、以召

使伊勢使可參入由仰下、召使歸來云、使々申上云、只今小雨

下、欲用雨儀如何、仰云、雨下之間、早可用雨儀也、使々入從東

福門經大極殿北壇上、立小安殿南昇廊北一間、^(東面)北上、一々

(第9紙)

入小安殿東一間、取幣從本路出了、仰外記召使王、々々来膝突、予取宣命解結緒、入筥披覽宣命、更卷給使王、行

幸御祈能可申之由可伝禰宜等旨示含了、使王出了、

召内記返給筥、起座帰之間、弁以下列立廊内、西面、予相揖

過之、復嘉喜門西本座、以召使可進諸社宣命之由仰了、

以使伊勢使立了由示藏人許也、依有御拜也、内記置諸社宣命、入筥、次第並置、以召使召八幡使、經兼朝臣

来、取宣命取結緒、入筥披見之後給宣命、行幸当日能々

可祈申由可伝神主之旨示含了、次々如此、次目左大弁長忠、

宰相三人々々来座前、給賀茂宣命出了、次目新宰相中將、宗輔

給松尾宣命、又目新宰相、伊通、給平野宣命了、次召稻荷

使前出雲守家保朝臣、藤原来給宣命了、次召春日使、外記業俊

来云、春日使藤原經能朝臣有二禁、相扶候門外、召外記給宣

命可伝給之由仰了、是又定事也、其後召内記返給筥、結緒皆在筥中、

起座出嘉喜門之間天晴、左少弁以下上官列立門西庭、南上東面

予相揖過之、予弁官間度々勤仕奉幣行事、今日為上卿初勤伊世奉幣事、神德之思心中欣感、新宰相伊通送

使云、次官為忠不參如何、予可催由仰外記了、於待賢門欲乘

車之間、行幸行事史行親走来云、行幸召物諸国三分之二

不濟、仍注文進上、大和拒捍使成国進申文云、惟宗国司不候、在序

官人貞村籠興福寺庄内不逢使、一日道作可致懈怠、又鳥

羽南門之南路霖雨之後破了、為之如何、帰家可沙汰由仰含了、

(第10紙)

帰家之後以消息件々々可奏院之由、送藏人左衛門權佐頭頼了、返事云、早々可奏院、且又右中弁可被參進之由可示者、仍告右中弁了、

六日、從去夜雨下、凡此間多以雨下、行幸道作之間誠以不便歟、

大和在序官人貞村籠興福寺庄中之事以左少弁申

殿下了、

七日、右中弁来申行幸行事所沙汰、其中院以南路本和

泉所課也、近日霖水之間及大破也、和泉一ヶ国力不可及也、早可

申院之由仰了、則参院送消息、相加近江可令作之由、院御氣

色也者、承了、之由返答、賀茂下御社御所并殿下御宿所屋自

本所作置也、而今年為大風顛倒如何、於御所者木工寮作葺

屋、於殿下御宿所以修理職可作之由下知了者、雖不承引所責

催也、

右中弁云、下野国召物付所縁可責之由、雖被仰下、又免給之由

藏人佐所仰下也、

又云、下総国所縁相尋之處藤原忠理者、早可責催之由仰了、

来十一日土用也、而雖葺屋土用以前居土居許、其後雖土用

間可立柱由、人々申出也、乍驚向陰陽頭家榮之處、先々八幡

行幸土用之間其例多、於葺屋者全所不忌也、兼置土居事、

殊所不聞也、付此說不可忌由、与右中弁議定了、

八日、從行事所舞人下襲・半臂料絹、紅花并移花以史生所

送也、上卿所課、依可令染色・裁縫也、從儀議師暹真來、行幸御祈

諸社御誦經僧綱兩三人辞退之由申上也、或見所勞替可入

他人、又無故辞退輩慥可責催由仰含了、行事弁尋云、神

御裝束夏冬可改歟如何、予返事云、件御裝束更衣不見、

只冬裝束調進之由所覺也、但夏時行幸度々也、尋彼例可

被一定者、夕方參近衛殿之間、右大弁送書云、今夕俄可有小

除目、任參議後於仗座未執筆、今日吉日也、仍必可參勤也、

次第大略可書送者、件次第書送了、入夜歸家、

十一日、巳時參院、以藤原忠能奏云、石清水行幸時內藏寮幣外五

色絹卅疋被奉也、天元二年三月二十七日円融院・一条院被奉也、其後又絕不被

奉、堀川院第二度嘉保二年行幸之時、宗忠為行事弁

調進也、其時被向人々被奉也、其後又不見候、此每年行幸

時不被奉如何、可隨仰也、仰云、只任每年行幸例、如此事可

申行也者、仍今度不奉也、

十二日、依不審事等、以消息尋行事弁之處、返事云、

和琴事・神馬事、已上藏人方沙汰也、但差繩等渡藏人方

了、挿頭花皆所令作也、神宝今夕籠內御物忌了、明日御

物忌間神宝御覽之故也、道々細工等雖致懈怠、只今

頻致其責也、又明日宣命草奏之由告大內記了、

—
(第 11 紙)

又綱所來云、行幸御祈諸社御誦經供給事、從行事所

課諸国被沙汰也、而近代之習全不相叶、就中住吉御誦經

覺実律師申送云、無私相語人只憑公家沙汰所下向也

者、若事不叶者、何為哉者、仍件旨下知行事弁之處、

慥可勤仕可仰撰津国司也、且又殊以如消息可仰住吉神

主許者、

又明日內御物忌也、今夕神宝可籠之由、仰下之處、承了者、

女所御裝束遲調出者、凡諸国未濟其數甚多、如此之間

万事懈怠者、今日行幸御馬御覽云々、

十三日、己巳、參皇居着仗座輿、招藏人高基奏行幸召

仰可候之由、聞食了後、移着端座、令敷膝突召外記、

少外記業俊候小庭、行幸行事予仰云、明日卯時可有行幸

石清水八幡宮、任跡天可候之由可召仰諸衛・諸司、外記

称唯入了、昔ハ召六衛符次將佐等所仰也、近代ハ伝宣次召大內記

宗光、令進宣命草、無辭別、只從去々年每年今日依御物忌內

覽之後又書写宿紙、管籠御進弓場殿付頭弁奏

覽、返給仰云、令清書、返給大內記、於清書者可候社頭

之由仰了、

兼日奏草、是大宮右大臣藤原俊家殿天喜元年八幡行幸之時例也、

今朝神宝御覽了、置左近陣付行事史生令守渡也、

—
(第 12 紙)

招舞人行事。藏人左兵衛尉憲隆云、舞人・陪從可早參由、可被下知也、又和琴申下具神宝可被持也、又神馬如差繩從

行事所渡藏人所畢、伴神馬藏人方沙汰也、不可被忘却

也、又舞人・陪從・人長裝束從行事所定奉藏人所歟、今夜之

中可被分也、事之不可有懈怠也、琴持所衆等可被催也、

皆存之由所奏也、

又藏人方事不可有懈怠之由、示付頭弁了、就中反閑

陰陽師可早參旨、内々示頭弁了、午後歸家休息、

今日行幸路巡檢也、而依有政行事上卿・宰相共不行向、

行事弁以下可行向之由示了、且又每年行幸強上卿不

巡檢云々、仍留了、且是依勤公事也、去年不巡檢者、

舞人下襲・半臂染色・裁縫所進上也、二藍也、

八幡神主兼（祀）仲息男兼実可給爵 宣旨、夜前被下、今日

下給大内記了、是從去放生会時陪膳氏人五位之數近代

不足故、以寺家拳狀預給爵賞也、

今日行幸御祈諸社諸寺御誦經也、諸社ハ差定僧綱一人

卒十口僧侶、三ヶ日間転誦仁王般若經、兩社行幸日可

無風雨難之由所下知也、諸寺ハ以何口僧同三ヶ日可祈申

由所仰下也、

十四日、庚午、当日先有大祓、留守外記國憲行之、從夜天陰、（惟宗）曉更小雨、今日八幡行幸也、予依為行

（第 13 紙）

事上卿、卯剋參内、（藤原家忠、源有七）左右大將以下人々多被參、頭弁仰云、

以右大弁頭隆・左少弁実光可候留守者、左大將移着端

座召外記被仰下、右大弁候座、藏人左衛門權佐頭頼來膝

突云、今日中臣神祇官人不候、或所勞、或在伊世、仍可獻

大麻人不候、而雖非官人可召氏人歟、將又以他氏人可令進歟、

被尋例之处、（十一月五日）康和三年御方違行幸之時、依無中臣官人、

以下部官人令獻御麻也、人々。可定申者新宰相伊通、發語申云、

雖一度有其例者、以下部氏人令進大麻何難之有哉、

人々同此定、予申云、大略同人々被申、但神祇官只今

申此旨甚奇恠也、兼日不沙汰事、猶可被問本官歟、左

大將以下一同被奏此旨、仰云、以定申以下部氏人可令進大麻

者、左大將召行事外記業俊、被仰下件旨、召寄膝突、此間出

御南殿、（實茂）右次將渡、左大將・（藤原經美）按察大納言・右大將・左

衛門督・予・別当左兵衛督・左大弁・三位中將・新宰相中將

列立、寄御輿、（藤原）葱華、左少將重通・右少將出御從東門、經烏丸・土御

門・東洞院・三条・大宮・七条・朱雀大路・鳥羽中道、於伊与守

長実朝臣棧敷院御見物、（藤原）此曉有御幸也、供奉諸司次第過之間

已及數剋、午剋着御宿院、予前行、先向宿所、還亭、

先尋大殿祭已祭了、又見廻之处、神祇權少副大中臣

基行具大麻在北鳥居下、予召入、立北門前、（近代候鳥居下之由雖申）

（第 14 紙）

於宿院北門下進大麻之由見度々日記、仍召入令候北門下也、下新中納言顯雅・中臣官人不候之由今朝議定了、而基行只今自伊勢馳參也。

侍從中納言実隆・左宰相中将雅定等參進途中也、入御

宿院後、公卿着東廊座、尋少內記之処遅參、御間主

水司供御手水、掃部寮敷葉薦、內藏寮其上立案

二脚置御幣六捧、神祇官其南立机四脚、昇置神殿

御裝束等、神殿御裝束今朝奉宝前了掃部敷使・宮主膝突、宮主座西、使・上卿東

少內記重実、持參宣命清書、予申大将云、可令奏給

歟如何、大将答云、近代行事上卿所奏也、早可奏者、予披

見後、令持內記進東幔門下、付頭弁為隆朝臣奏聞、

則返給後給少內記、可候社頭由召仰了、左右將監引

御馬、(藤原)宗能朝臣・成通朝臣・忠盛三人引御馬、(平)上臈三人引之、依所狹少也、供御贖物、

陪膳頭弁為隆朝臣、益供藏人佐頭頼、宮主奉御麻、

返給着座、入從東幔門予入從東幔門、着座一揖、不脫沓、御禊

了引出御馬、徹御贖物、予寄西案下跪指笏取西幣、

又東案上西幣取二捧立、(十一月二十八日)南面、長元二年行幸時、土御門右符為上卿取三捧也、一三五首、然而天喜六年大宮殿上卿

時、取二捧給也、仍今日陪從於幔外發歌笛声、主上於簾中有

御拜、東一間敷御拜御座頭弁頗示予如本分置幣、跪拔笏復本

座、左大弁長忠行事宰相取藤花枝入從東幔門、指予冠

左、婦人、予起座出從南幔門、人々多婦入東幔門、然而大宮殿出從南門給也、尤可然、内々尋賞、雖每年行幸不

被仰由、頭弁此間殿上人給舞人・陪從插頭花、神宝・神馬・舞

(第 15 紙)

人先行、予・右中弁雅兼朝臣・少內記・外記業俊・史行親等相具登坂之間、老後之身神心屈了、未剋參上宝前

着中門東腋座、上卿座高礼一枚、其東數同疊一枚為弁座、其東敷紫端疊二枚為上官座、中門西寺家所司座

昇立神宝・御裝束於中廊、行事史生等相共沙汰也進宣命座、廊中

南一間、少內記重実進宣命、注入筥、予取副宣命於笏、先兩段再拜、次指笏誦宣命、中門北、卷之、取副笏又兩段再拜、

(四)天喜六年大宮殿、先二拜、次誦宣命給、又二拜也、嘉保二年大殿上卿之時、先兩段再拜、宣命之後、次兩段再拜也、拜神之道以礼節深為先、故今日付嘉保

例、召俗別当兼孝給宣命、祝申拍手、三度、予相隨、內記

取筥、予復本中門東座、此間仰舞人廻御馬、神馬為先、度々例八度

神馬引立南階下、次令馳御馬、是嘉保例也陪從此間歌一二

歌、此間寺家計受神宝、取筆合点、入自南中門如何、可入東廊東、尤可然、舞人入從中門於中廊舞、

宗能朝臣、成通朝臣、忠盛、長輔、能忠、新、經定、新、教長、新、藏人範隆、長輔・藤原惟兼二人有障不立舞也、舞人有憚時於宿院先可奏事由也、

而只今申上、(五年三月四日)無間昔長保例上卿・弁共立陪從前、而近代

只在本座也、仍予・弁共舞間在座、兩舞了令敷御神樂

座、人長兼近參、始御神樂後、予与兩中将於馬場屋只暫

休息、則復本座、四位陪從盛家朝臣只今參上申云、於宿院

落馬、從面血出、洗清之間遅參也者、取物神・幣・杓、韓上了、(神)

穀倉院居饗、上卿・弁以下舞人、陪從皆居之所司進盃、次召材男共、陪從之

中有散樂輩、万人断腸、前張一々令尽、又令歌星、(才九)

次乱声、曲舞、左、万歳樂、六人、賀殿、龍王、右、延喜樂、地久、納蘇利舞間入夜、次行御誦

經、先立礼盤、前机、磬台立中廊、南一間、導師・權寺主云々此間給官祿、別当法印祿行事弁取之、權別当祿史取之、(嚴清)

(第 16 紙)

俗官祿史生取之、
神人等料各給了、御誦經了、御導師被物外記取之、不仰

勸賞、則起座、歸參之間、陪從在後、發歌笛声、進北幔

開白殿依御障不參宿院給、仍行事并持參御祿於御宿、

門、招頭弁奏御願平安、遂果之由、左大将被奏見參了、給公

卿以下舞人・陪從等祿、寄御輿、初警蹕、亥四点還宮、鈴奏

少納言宗成名対面、(藤原)
左少将忠隆今朝早且有行幸大祓、

差留守外記国憲令行也、

侍從教長令取左右馬口如何、行幸之時雖年少人只

張馬綱之由、先日所聞也、是臨時祭之時事云々、

新藏人源高基為留守、

予任侍從初勤仕此宮寺行幸舞人、(三月十一日)
承曆二年、

任右中弁初勤仕宮寺行幸行事、嘉保二年、

今日勤上卿、誠知浴神德致公卿歟、

今日次第、付天喜六年(四)
上卿大宮殿、・嘉保二年上卿大殿、二二ヶ

度例、所申行也、

寺家行幸從円融院御時及今度卅度也、

十七日、癸酉、天晴、今日賀茂行幸点地、行事右中弁

以下行向也、

諸国全不弁濟、行事所事可闕怠也、又去行幸淀浮

橋可壞之由、行事檢非違使申上之間、右中弁送書

札也、兩条共奏院可被隨 院宣之由、送返状了、浮橋

(第 17 紙)

壞事先々所奏也、

十九日、天晴、外記業俊来云、去行幸不參諸司官人等

可注申由、藏人左衛門權佐所被仰下也、仍令注候者、猶可

被仰下上卿事歟、五位藏人直仰下外記事無其謂也、

廿日、天晴、參内、頭弁来膝突云、八幡別当法印光清一日行幸

賞追可隨申請、俗別当兼孝朝臣可加一階、本從四位下也、

是每年行幸時々有賞之故追申請也、仍被行由頭弁

所示也、法印賞便仰下頭弁了、可給書宣旨之故也、須

仰行事弁也、只今不候、仍仰頭弁也、

又召少内記、俗別当兼孝可敍從四位上也、以詞仰下了、可書敍
位之由

存心中之処、大外記申云、如此行幸
賞先々以詞仰下者、仍所宣下也、

廿二日、凶会、右中弁来云、行幸召物不弁濟、就中甲斐国司

雅職(源)一物不進也、早可奏院由所示也、凡国々々皆殘也、

期日近々懈怠事多者、

從行事所舞人下襲料紅花・移花相具史生所持来

也、仰女工令調、

廿五日、辛巳、伐天晴、賀茂行幸巡檢也、弁已下行向也、

廿六日、壬癸午、天晴、予着陣座、招新藏人高基奏云、行

幸召仰宣命草奏可作、則归来云、聞食、移着端座、

以官人召外記、少外記業俊行幸行
事也候小庭、仰云、明後日辰

(第 18 紙)

剋可有行幸賀茂社、任跡可候之由、召仰諸衛諸司与、外

記称唯歸了、

次召弁、装束使右中弁雅兼朝臣来膝突、明後日行幸

御輿可令装束、葱華、又行幸路土御門・東洞院・一条、件由

可下知也、

右中弁則行幸行事也、此次行事所相叶哉相尋之処、

申云、大略叶了、但両面三段許、荷輿了装束少々不足、

諸国未濟巨多也、今明日所責催也、差進濟、不可闕也、

猶早且参院可被奏也、不然者諸国難承引歟、近代宰

吏不恐公事也、又弁云、甲斐守雅職召物一日所免給也、

是中宮(藤原璋子)白河御塔宮々之故也、但從大藏省所切也、両面可

免歟如何、答云、只可随院御定、又云、庭積料從大藏省切

宛伊勢、件国司全力不及由申返付使部、雖責催

凡不可叶、可切改他国由、雖仰省又不承引如何、予答

云、如此事(又切改)早可被申、院、不然者近代作法不可叶也、凡末

代公事恐朝威輩不見歟、後聞、依院宣切改近江・丹波了、次召内記、少

内記宗信来令進、宣命草、見了進弓場殿、付新藏

人奏聞、返給以内記令内覽、今日依御物忌先奏聞、次

令内覽也、於清書者可持参社頭之由仰了、上達部明後日

卯剋可被参由可催申旨、仰行事外記了、及深更退出、

(第 19 紙)

兼日召仰草奏是度々吉例也、

近代召諸衛仰事不叶、仍只以外記伝宣也、明後日御衰

日也、仍今日召仰也、

廿七日、天陰、入夜雨下、行事弁申送云、人長装束称別招由、

不受取者、又両面今二段不足、是遠江不備者、早可申

院由送返事了、近代諸国并近衛官人全不随上命、何為

哉、又御所葺屋早可葺檜皮之由、下知先了、或有不葺時

今夜雨已下御所漏歟、雨脚不留者甚不便也、件旨只今

又示行事弁了、行事弁兼木工頭也、

又上下御社辺有賑給歟、慥可給由下知了、

晚景弁参、院申之処、人長兼近早々装束受取了、

入夜雲合雨下、舞人下襲令裁縫送行事所了、

廿八日、甲申、伐并、厭對、從夜前雨下、子剋以後雨脚殊甚、今朝

雨弥盛、先々賀茂行幸大雨之時延引也、仍今日行幸存延

引之由之処、頭弁送書札云、縱雖雨下不可留之由、從、院令

申給也、早々可参者、巳時許馳参内、右大弁并左少弁実光

留守由被仰下、人々或遅参之間、巳及午剋出御南殿、光平、反閉

按察大納言・予・別当・中宮(藤原通季)權大夫・大式左大弁・源宰相中將・

三位中將・新宰相中將・新宰相列立宜陽殿西庇、左右大將

立軒廊并校書殿、別当云、左右大將雨儀、立南殿壇上云々、此事可尋、寄御輿、葱華、次將、自取笠相從

(第 20 紙)

出御從東門經土御門・東洞院・一条、院御所於正親町亭北對西妻、北門所御覽也、供奉諸司一々渡之、

此間雨脚殊盛、鴨河浮橋所々流損、檢非違使等取人

先令訪水、防殿上達部步渡橋、御輿留鳥居下、神祇中臣

官人獻御麻、廻御所南入從東幔門寄御輿、御所部屋東敷筵、為御輿寄、上達部

取筵列立、北面西上、公卿着座了、殿下雖令參給、御馬供奉、有御憚、御

禊以前令退下宿所給也、主水司供御手水、予於公卿座前

見宣命、內記宗信持參、於南幔門下付頭弁為隆朝臣、奏覽返給、

無別此間雨頗止、掃部寮敷葉薦、內藏寮立案二脚、置

御幣四捧、神祇官人昇立神宝、先立高机二脚、但供御贖物、無御裝束、

從北供之如何、從南可供歟、頭弁陪膳、藏人少將公教益送、左右近將監引

御馬、左御馬、舞人上臈宗能・成通朝臣・忠盛引御馬、宮主出

從北幔門可進南敷、獻御麻、返給着北座、予入從南幔門着

北膝突、小揖不脱、宮主御禊了退歸、引出御馬、予進寄

案下、跪指笏更立、取北案北幣并南案上北幣二捧立、

向社於簾中御拜、此間陪從發歌笛声、御拜了頗有

気色、予如本分置御幣於兩案上、跪拔笏、着本座、

左大弁長忠行事也、取藤花枝指予冠左、予少揖起座、

出自御前幔門、此間頭弁來仰權禰宜季次一人(鴨)可倍給

一階者、正禰宜惟長重服、(鴨) 第二者有勳賞也、昇出神宝、々々・神馬・舞人先行、予・

行事右中弁雅兼・內記宗信・外記業俊・史行親相從參

(第 21 紙)

入御社中、先着西舍屋、帶劍人、解劍也、行事史生・官掌等

昇之神宝・御幣等於中門前神馬引置、予着宣命

座、舞殿北二間、敷座、內記置宣命筥、予取副宣命於筥、先兩段

再拜、指笏讀宣命、居、拔笏又兩段再拜、禰宜來申、宣

命書取可返奉也、仍給宣命、頃而神主歸中門前、伝神宣、

予拍手三度、又兩段再拜、(四月十五日) 是嘉保二年例也、進榭、取之指冠後、

隨禰宜申也、宣命返上、予取之返入筥、召內記返給神宝早受

取之由、仰諸司之處申云、去年行幸之時神祇官人來

所渡社司也、然者件事可候歟如何、予仰云、他上卿例不可

候、是只永承二年堀川右大臣殿、(藤原賴宗) 天喜四年大宮右大臣殿、

嘉保二年此大殿上卿、予為右中弁行事時只行事史

生等計渡社司受取也、加之八幡・賀茂兩所行幸同儀也、

去八幡行幸宝前神祇官人不參上也、仍同儀也、我上卿

勤任用件三ヶ度例申行也、只可隨上卿申行也、社司等

隨仰由申上皆受取了、史生披目錄、計渡、內藏寮御幣庭積等

一々計渡了、予復西舍屋、弁・外記・史・內記列座此所頗絶

神馬并舞人御馬廻、八度も、嘉保例如此、而近代三度廻云々、神馬廻了結付中門、

此間陪從歌一二歌、駿河舞、求子、舞人十人皆立舞如法舞、次令敷座、

御神樂、近方・時元取拍子、人長兼近、取物了、穀倉院居衝重、有孟、酌、上卿・

弁已下前同居衝重、又社司來居饗饌、上卿前高器二本、弁已下各一本也、嘉保

(第 22 紙)

例上官座用衝重、用同高器如何、如此事逐年變改歟、社司進盃佗弁座、弁留盃、上官座

又別盞也、(二年四月二十三日(源頭房)符) 右中弁談云、承保例上卿六条符、(大江) 弁匡房卿也、件日此盃留弁座者、今間仰行事史并

史生三四人令參上御社也、御裝束不審也、人長起召才男共、

陪從兼定等有散樂興、前張了、令歌星・其駒了、小

乱声・曲舞、(藤原) 万歳樂、六人、賀殿、地久、延喜樂、納蘇利、予未舞之間、召寄弁、

權禰宜末次可給一階之由仰下、弁復座、召出末次仰了、予

又召寄内記、一階給末次由仰含了、給祿於社司、(季) 史生取之、

同給神人了、事了帰參、(季) 舞人前行、陪從在後、發歌笛声、於幔門招頭弁、

奏御願平安果遂由、此間及秉燭、(前) 予揚鞭、竊度行、徹御。幔敷座

召公卿、舞人一々上御馬馳了、寄御輿歟、

上御社近辺寄小宿所、則与中将參御所、大殿祭了哉

由相尋行事弁、申云、神祇官參勤已了者、不經幾程

御輿已幸此御社、本有御所、仍西面作御輿寄、北庭昇

立神宝、殿下有御憚不令入内鳥居中給、御于御宿所也、

御輿次第如下儀、(但北面、右御馬被進也) 不奏宣命、又御拝了、不帰着

本座、(給挿頭花、先了故歟) 置幣之後、直出從幔門、此間雨暫止也、頭

弁来仰云、神主成家可給一階者、入社中直着宣命座、

(賀茂) 帶劍人、依不可解劍、直昇立神宝於小庭、讀宣命儀如下儀、(以) 着此座也、

但讀了候宣命給神主、管返給内記、但神主伝神宣了、予

拍手三度、(不兼奏) 又兩段再拝、(嘉保例也、此拝近代不見也、然而嘉保時有此拝也) 着舎

(第 23 紙)

屋敷、穀倉院居衝重、(取物了後居之、嘉保例、社司上卿以下座前居、用土高器、今度不居物如何、陵遲歟)

夜深風冷雨脚不止、事了帰參、奏事由、左大将奏見

參、給舞人・陪從・公卿以下祿、(行事弁殿下御祿、持參御宿所) 献物付御厨子

所歟、近代絶了、上下社有賑給、徹幔敷座、召公卿、舞

人馳御馬、寄御輿、(初警蹕、子一剋還宮、先大殿、於門外献、祭、)

御麻、公卿列立宜陽殿西庇、少納言公章於東中門鈴奏、(藤原)

(依東) 左少将忠隆同之、諸卿名対面、了入御、人々退出、

今日終日雨下、万人有苦色、

下御社御所從院御時社司作也、而今年為大風顛倒了、

仍今度用木工寮葺屋、又殿下御宿所・公卿座屋仰

修理職合作也、上御所自本有屋、公卿座修理職同作也、

舞裝束奏事由借自円宗寺也、

葺屋行事檢非違使所運送也、或先年木工寮地

人夫有運時云々、

(以下余白)

(第 24 紙)